The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 299. JANUARY 9TH. 1892.

EDITORIAL:—The New Year, a time for Making Plans.

CHILDREN'S COLUMN:—Little Lord Fauntleroy. (Concluded).

MISCELLANEOUS:—A trip through the land of Earthquake disaster; What is your Object as Student (Answers from a Class of Ethic): My Dead Father (II).

HOUSEHOLD:—New England Kitchen.

CRITICAL NOTES.

第三百九十九號目次

●社説 年頭策士多し○智徳勇兼備

●兒籃 小公子(大尾)若松しづ子

●雜錄 震地旅行○汝が志望を言へ(女學生の答文)○父を失ひて后の述懷(すゞ子)

●隨感 (花園女史)○叔父を吊ふ(方寸子)○先づ心を修めよ(川合信水)

●家政 食物店

●批評 博愛雜誌○誕生日○万國婦人禁酒會年報○ユニテリアン○漢城之殘夢

●時事 何日は撰擧日なる○民友子と中島副議長○井上角五郎氏の辨○實業家と時事翁

●問答

●女報

●震地傳道隊報告

Seed of W. C. T. U. in Japan

No report has been received from Japan in response to my blanks. I formed ten unions in nine cities during the summer of 1886. At Yokohama the union was composed of missionary ladies alone, who could not undertake to work outside of their own mission. One union in Tokio was of the same sort. Another in Tokio was of Japanese ladies only. The last news I had of this union it numbered five hundred members, and had taken up many departments of work. Many men's societies have been formed since that year, and a very widespread influence for temperance exerted. An especially good work has been done for purity, and against the Contagious Diseases Act (for women). I find in Mrs. Woodbridge's report the following statement over the signature of Mrs. Saku Asai: "In 1887 when Mrs. Leavitt visited Japan and held meetings and talked on the subject of temperance many of our people were greatly interested, and at last some Christian women, though very few at first, gathered together and organized, Fujin Kyofukai, or Women's Christian Temperance Union of Japan, in December of the same year." Mrs. Saku Asai is in error upon two points. My visit to Japan was in 1886 not 1887. Then I formed and officered a union, as is well known to many; among them, Mr. Iwamoto, the first editor of *Fujin Kyofu Zasshi*, and always a loyal helper of the union. But I had remained in Tokio till cholera had become epidemic, and during the remainder of the season no meetings were possible. The Government allowed none. The first president died of cholera. But for Mr. Iwamoto's exertions, the union would have died, but it did not. The December event referred to by Mrs. Saku Asai was the revival, not the first organization. The unions of Chiba, Gumma and Ichu were not formed by me, and must be added to the original number. The membership of the three above named with Tokio is 700. By. M. C. Leavitt.

(Report made to the first Convention of the World's Women's Christian Temperance Union)

女學雜誌　第二百九十九號　明治二十五年一月九日發兌

社説

年頭策士多し

除夜に於ては何人も痛恨者となり、元旦に於ては何人も經綸の策士となる。云く、一歳の計謀は春にありと。蹉跎せる志望の膝を直うし、幾回の失敗を年と共に葬むり、飜然轉思して、新地新天に入る。云く、過たるは追ふ可らず、將來は更ためざる可らずと。思想湧くが如く、經綸織るが如し。

倒るれども復起き、爲ん方盡れども望を失はざるは、眞の勇士なり、吾人深く之を重んず。然れども、毎歳經綸を畫して毎歳之を畫餠に屬せしめ、幾度か改めて而して幾度か悔るものに至つては、遂に一事をだに能く成就すると能はざるを知る、新年の經綸者は、必ずしも有望者にはあらず。

凡そ、一事を成さんと欲するものは、先づ省みて之を自己の本領資格に問わずんばある可らず。たとひ、其の事業の極めて緊要なるとを知ると雖ども、之を行ふの天職自己の上に存することを確認せずば、輙はち遽はかに之に當る可らず、世上既に緊要の事業を生ずるときは、亦之を爲すに足るの人自づから存せずんばあらず。而して自己自ら信ぜず敢て之に當るは則はち此の天指の人物の出で來るを妨たぐるもの也。又既に其事業の任務をもて自己の天職なりと信ずるも、今日の我、よくその神聖なる事業に適するや否やを深慮せずんばある可らず。種は終に穗を出すといへども、穗の爲めに直ちに種を用う可きにあらず、自から備ふる所ろなくして而して大任に當らんとするは、事業の神聖を瀆すもの也。

豈唯だ之を瀆すのみならんや、自から養ふ所ろ足らずんば、幾累々の事業を成積すとも、遂に土砂を盛り、木石を集むるに異あらず、之を目して「人」の事業と爲すと能はざる也。夫れ、ソロモンの智を以てすとも百合の花の美を織成すと能はず、たゞ成就したる事業の多少精粗に付きて之を言はゞ、人の事業なるものにして、草木昆虫の事業に及ばざる遠きもの極めて多し。蜂は優れたる家を造り、蟻は巧みなる庫を搆ふ、淺智短才の人類に優ると屢ば之れあり、而して尚ほ人の事業を目して万物事業中の最とも靈玄なる者となすは何の故ぞ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

人は、其事業に配するに品格を以てするがゆへ也。所云る人の事業とは、徳の影なり。是心之を命じ、智徳之を飾り、發表して之を事物の形に象どる、此に於てか唯禽獸の力に成れるものと異なる。左れば、人の事業にしてもし人性の徳を配することなくば、單に禽獸木草の結果に異なることなし、何をもてか重んずるに足らん。

此故に事業を外に成さんと欲するものは、先づ内に養ふ所ろなかる可らず、養ふ所ろ内に集まり、積誠發して煥焉たる光采を放ち、凝つて事業となる、此に於てか初めて「人」の事業と云ふとを得べし。

悲しい哉、今の同胞、之を末に求めて之を源に捜らず、漫然弦を放つて而して后ち矢の鵠に中せんとを祈る。如此き人の事業は、成るときは僥倖なり、成らざるときは自然當正の結果あり。而して其僥倖にして成就したる事業も之に人の徳を配すると無きが故に、忽まちにして崩る、薄氷の春天に浴くるが如くにして消えなんとす。噱するもの笑つて曰く、塞の河原の子僧は石を積みて崩し、又積みて崩すと。然れども、今人の所云る事業なるもの亦之に同じ。

左れど、永久不滅に引續すべきものゝみを以て堅確なる事業なりとは言はず、十年にして成り一日にして形を滅するものもやあらん、只だ所云る眞正の事業とは、有形事業の形骸の上に存せずして、之に配屬せる人の徳性の結成せられたるにあり、故に有形事業は一日にして形を滅するも、徳は千古に絶ゆることなく、遠永に續きて長久ならん、事業の堅確なるものとは即はち是也。

此故に新年の經綸者は先づ深く自省すべし、將に行はんとするの事業に對し、自己の任命は何如に、自己の適才は何如にと。その本領資格にしてもし之に適はば、則はち万艱を排して勇進せよ、其万艱は一に自己を利し、自己の徳性を増すもの也。然れども、靜念肅思して眞に自己の之に適するとを信ぜずば、更に退ぞきて養ない、大ひに待つ所なかる可らず、其直ちに彼事業に着手せざるは、即はち先づ此の事業に着手する所以あり、今日深く養なひて、明日強く任ぜんには、人の事業として成す所ろは今日も明日も敢て増減する所ろあらず。

故に告ぐ、新年の經綸者よ、君、暴りに多く計畫すると勿れ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

、先づ靜かに思ふべし、自己の德、自己の命果して如何んと。君、槩りに奔走すると勿れ、先づ落居て惟んみるべし、賢者他に存し、天の命星其上に輝やくとなきかと。事業とは、只だ計畫にあらず、亦沈思の事なり、只實行のみにもあらず、亦修養鍛練の事なり。忙々たる新年の策士、維幄の內に思ひを難ますを止めて、須からく眞心聖殿の內に誠を密そむべし。我は今ま如何ん、本我は今ま如何んと。

智、德、勇、

久しひ哉、智德勇兼備の偉人なきこと、世の所云る道德家とは、吾人が謂ふ所ろの好人物あり、道念鈍く、義氣淺し、吾黨が愛すべきものにあらず。世の所云る勇者とは、吾人が謂ふ所ろの僻人物なり、和氣足らず、情思寒し、吾黨が重んずべきものにあらず。世の所云る智者に至つては、輕薄才子のみ、顧みるだに足らず。

夫れ智ありと云ふと雖ども、道念高潔ならず、言行道に適はずんば、是れ愚者の如し、何んとなれば、道德に合せざる人智にして能く大成功するものあらざれば也。左れば、智は德を兼ねずんばある可らず。智すでに德を兼ね、而して之を斷行するの勇なくんば、亦た無智無德なるに均し、何んとなれば、其の德に於て必らず爲さゝる可らざるを知り、智に於て其如何にして成功すべきやを知り、而して尙ほ之を決行せずば、其智は愚の如く、其德は惡に均し。左れば、智德は亦た勇を兼ねずんばある可らず。

二三年來道德に饑え、世上、修身の事を談ずるもの多し、犧牲獻身の文字寧しろ流行語となりぬ。數年前或人々が之を唱出せし當時には似もやらず。

喜こぶべくして而して歎ずべきは、道德を修むる人の智を欠き、勇に弱からんとするの一事是れ也。夫れ、眞の德とは、即はち智也、勇也。然れども、今の德は、殆んど盲信に流れ、微弱に屈するの恐れなきにしもあらず。其の眞智眞勇を兼ぬるの方針に至つては、迷ふ所ろ甚はだ多きが如し。

世上、何處にか、智德勇兼備の偉人物ある。富岳千古に秀で、刀根万世に淸く、太平洋、旭日に照つて白し。大日本國それ何處にか、眞人豪傑ある。吾人は、朝夜輾々反側して寤寐に之を思ひ想ふもの也。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

兒籃

小公子

第十六回（乙）

若松しづ子

さて當日となつて木の下や天幕の中、又柴生の上などに群集した人の數々は夥しいことでした。これらは皆百姓どもと、晴着を着たおかみさんたち、若いものや、娘たち、戯れて互に逐ひ廻はす子供たち、好い折と噂話を樂しむ老婆どもでしたが、お城の中には、亦賑はしさを見たり侯爵に祝を述たり、エロル夫人を見やうとして來た紳士貴婦人か別に一群を爲して居り升た。其中にはロリデール夫婦、サア、タマス、アッシ氏と令孃たち、ハヴイシヤム氏などは勿論、ヴィヴィアン、ヘルペルト孃といふ、かの美人が美事に際立衣裳姿にレースの日傘をして居られ升たが、相變らず紳士たちが側に附き纒とふて居升た。併し此婦人は亦紳士たちより誰よりフオントルロイが一番に好な様でした。そして、フオントルロイが孃を見て側へかけよつて、其頸に抱きつくと、孃は自分の祕藏の弟にでもしさうに、接吻して、そして、

フオントルロイの可愛い、お子！ 此度は結構なことでしたと私は大層嬉しう御座い升よ、

そして此あとで、一處に庭を廻歩て、フオントルロイが何くれと指して見せるに任せ升た。それでホ氏とヂックとが居る處へ行升た時、フオントルロイが二人に紹介して

ミス、ヘルペルト、これはネ、僕の舊い〱朋友のホブスさんです。それからこれがモ一人の舊い友だちで、ヂックといふんです。僕があなたが大變奇麗な人だから誕生日に來れば、見られるつて、いつて置いたんですよ。

孃は二人に一々握手し立止つて例のしとやかな調子に言葉をかけ、米國のこと、船旅のこと、英國へ來てからのことなどを尋ね升た。其間フオントルロイは側に立つて居て、ホ氏にもヂックにも孃が氣に入た様だと思ひ、讃嘆の眼を離さず守つて居て頰は嬉さに眞赤になつて居升た。ヂックがあとで極まぢめで

ありや、よつぽど奇麗な人だナア、花の様だナア、丸で……

……マア花だ、ちげいねいんだ。

誰れもかも、此孃君の通る跡を見、又フオントルロイのあとを見升た。そして天氣は晴朗に、フラホは飜り人々は遊び

戯れ、悦び跳りなぞして一同歡樂を盡しまして、祝日も終までは、若君も實に嬉しさが心一杯になつた樣でした。全世界が此小供には美しく見えました。まだ其外にも悦んだ者が有ました、それは生涯、富と貴とを我がものにして居ても、無邪氣に物事を樂しめなかつた一人の老人でしたが心が幾分か樂しくなつたといふのは、幾分か心が善良なつたからのことでせうと思はれ升。固よりフォントルロイが想像した通りに善くなられた譯では有ませんが、兎に角、ひとつ愛する者が出來升て、幼子の無邪氣深切な心に思ひ起てお勸め申た慈善的なことをする中に一種の樂を覺へたことが屢あつてそれが先づ一心の變る始めなのでした。それに又一つ増に嫁が氣に入る樣になり升た。から人々がエロル夫人さへ御寵愛なさる樣になつたといふも空言では有ませんかつた。其可愛い丶聲を聞き、其可愛い丶顔を見て、どうやら好になり、御自分は安樂椅子に坐りながら母が子に物を言ふ樣子振りを窺ひ、其聲色に耳を澄して居られ升た。そして自分には極く耳新しい慈愛を籠めた優しい言葉を聞くに付て、始めて悟られたことは、ニユーヨーク都會の片外れに住ひをして、萬屋と知己で、靴磨と親敷したといふ者が、なに故この通り品よく、雄々しくつて、運の廻り合せで、英國に城郭を構へた侯爵の尊位を相續す可きものとなつても、誰の外聞にもならぬ其理由でした。必竟、甚た分り易い事柄でした。斯いふ心の親切の優なお人の側に成長して、いつも人のことを親切に考へ、己れをあとにする樣に躾け、敎へられたからでした。これ丈のことは誠に瑣細なことでも有ませうが、何よりも立派なことです。此小息子は侯爵がどの位格のあるものお城が如何なるものといふことは一向辨へず、武張つたとも、華々敷ものも夢中でした。併し自分が質朴で、人を愛することを知つて居升たから、いつでも人に愛せられ升た。人間と生れて、これ丈のことさへあれば、王の家に生れたも同然です。

ドリンコート侯爵が此日フォントルロイの群集の中をあちらこちらと歩み、見知の者に言葉をかけたり、人に挨拶されれば、手早く辭儀をしたり、ヂックやホ氏を饗應したり、母やヘルベルト孃の側に立つて、其話しを聞いて居る處を御覽じて、至極孫息子に付て滿足を感じられ升た。そして、フォントルロイと同伴で、ドリンコーと領内の小民どもの中でも先上

席につく可き人々が會食の饗應を受けてゐた一番に大きな天幕へ行升た時ほど滿足に感じたとは有ませんかつた。此人々は侯爵の御齢を壽きて杯を擧げて居り升たが、これまで御名を唱へて祝詞を申した時とは餘程異つて、言葉も一層誠實、熱心を籠めて有た樣でした。第二はフォントルロイに對する御祝詞を述べ升た。そして若君の人望如何に付て萬一疑を容る者が有つたとし升れば此時にこそ全く氷解てしまはぬとはよも有ますまい。喝采の聲は杯を當てる音と同時にドツト擧て八釜しい程で、人々の情愛の深いと、若君を思ふとが非常な處から御奥の方樣か臨席になつて居るのも一向憚からぬ樣子でした。一時にワツトどよめいた聲がなくなり升と、一二の優しさうな女がお袋樣と侯爵樣との間に立つて居られた若君を望んで、眼に涙を湛へ、互に

お可愛らしい若樣に天慶を祈りませう。

といひ升た。小フォントルロイはます／＼興に入り升た。ニコ／＼ながら立つて居て、嬉しさに髪の根本まで眞赤になり、頻りに人々に會釋して居り升た、そうして母に、

かあさん、みんなが僕好だからですかネ？さう、かあさん？僕嬉しくつて。

といひ升た。スルト侯爵が子供の肩へ手を載せて、

フォントルロイ、貴樣は一同の親切に對して禮をいつたら好からう。

フォントルロイは先お祖父さまのお顔を見、それからお袋の顔を見升た。それで、少しく臆せる氣味に、

かあさん、しなくつちや、いけませんかネ、

といひ升と、母は只ニッコリして、側のヘルベルト孃も同じ樣にニッコリし升た。それで二人が頷くのを見て、一足前へ進め升と、一同が眼を注いで見て居り升た。そこへ出た處いかにも美事に、無邪氣な小息子で、其容貌といへばいかにも雄々しく、又愛らしくも有つて、天下に敵なしといふ氣配が有りました。さて一段聲を高め幼な聲清朗に申したとは、

僕、みんなに有がたしッていひ度んです。僕は今日の誕生日が大變面白かつたから、みんなも面白かッたと好いと思ふんです。それから……僕、侯爵になるの嬉しいんです。僕始めは侯爵になるの嬉しいなんて思はなかつたけど、モウ嬉しくなつたんです。僕はこゝも大好です、どふ

も奇麗だと思つてますの……夫から……僕侯爵に成たら、一生懸命で、僕のお祖父さんの樣に好い人になる積りです。さうして一同の拍手喝采が鳴り止まぬ中に、先づ役濟みといふ調子で一寸溜息をつきながら又一足退がり、侯爵の手につかまり、ニコ〳〵しながら、近く寄り添つて居升た。

○○○○○○○○○○○○

こゝで此說話も終りになる處ですが、其前に一寸一言不思議なことをお知らせ申して置ねばなりません。といふは、ホ氏が非常に貴族的の生活に深醉し且、舊友と袂を別つが厭さに、とふ〳〵ニユーヨークの角店を賣つて、エールスポロの市へ落着き、小店を開いたといふ一條です。此小店はお城の贔負を受ける處から大繁盛にあり升て、そしてホ氏と侯爵とは別段懇意にはなりませんでしたが、一珍事といふは、ホ氏は侯爵より誰より貴族的になり、每朝官報を讀むまでになつて貴族院の樣子なども委しく知つて居たといふ事です。そして十年程過ぎてヂックが卒業をして、カリフオニア洲なる兄の許に尋ねよふといふ時、萬屋さんに米國へ歸り度ないかと問い升と、まぢめになつて頭を振り、どふして〳〵、あつちへ落つくとなんどはまつぴらだ。わしはこれでもあれの側に居て、一寸後ろ見をして居る積りなんだ、若い、働きのあるものには結構な國だらうが、矢つ張り、得失處もあるな。全躰、祖先なんといふとさへないし、侯爵といふものはなほのとだといひ升た。（大尾）

雜錄

震地旅行

人情露發

非常の事に際會せずば、人を知ると難し。貧しふして而して貞婦を知り、亂れて而して良臣を知る。盤根錯節に會せずんば何をもて刃の利鈍を辨ぜんや。左れば、此度の如き天變大災あるに際してこそ、人々が平素の心掛何如を知るべきなれ。蓋し善き人は善き心を發動し、惡き人は惡き心を發動し、已がじ、本性の向ふ所ろに走らんとす。余が夙く震災地を巡視せんと欲したる一の理由は、此人情を考へんとてなり。前に吾社員が逸早く彼地に趣きたる節は、重に此事を言托し、其知ら

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

せによりて得たる所多し。但親ら之を視察せざるを憾みとせり。然るに校務社務の故をもて尚久しく外出の途を塞がれ、心あらず出發せざりき。年の末三十日の朝た、鳥の籠を出で中天に舞ひ上るが如く、魚の泥池を逸して太洋に泳ぎ出るが如き心地にて、親友、大須賀亮一君と共に震災地へと向ふ。

石井十次君

久しく石井十次君の名を聞く、名古屋に着せし夜、其宿りに行き、相話して曉三時近くなりぬ。

孤兒院の維持は、神に倚らずんば能はず、人の定めたる豫約義捐を頼みとせば、其頼む所ろは海中に盛れる砂の丘の如く直ちに崩れん。余、この事を石井君に問ふ。君の云く、最初岡山孤兒院は、人の豫約義捐を頼みとしたり、當時、思ひけらく、岡山近在の田地を水かふに、所々池を堀りて水を貯はふ、常には天の與ふる雨水を頼みとし、もし天燒け雨枯れて久しく潤ひなき時は、彼の人造の池を破りて其水を融通す、則はち天の與へざる時に人の貯畜を用ふるなり、孤兒院の維持も亦た斯の如くせんとし、臨時偶然に知らざる人の義捐せらるゝは天の與へ玉ふものとして受け、たゞ其の足らざる時に補はんとて兼てより豫約者の貯はへを造らんと考がへたるなり。然るに、此豫約は尤とも頼みがたきものとなり、平生定めて頼みとせざる臨時偶然の義捐反つて確固堅定したるものとなりぬ。豫約者は約束せしのみにて實際に金を送り玉はず、送るときも最と不快氣に持なさるゝ人も無きにあらず、院の事務掛の手數のみ多くかゝりて實地の收入至つて少なければ、遂に斷然此の方法を止めたり。余が力にては到底豫約者を動かすと能はず、と。此の結末の一語、深く余をして感動せしめたり。

其決意の動機

石井君が故郷に或る老婆あり、二人の乞食の兒を馬小屋の内に住はせ、身は豆腐を賣りて得たる僅かなる利潤にて之を養ない居たり、而して此の二人の内の一人今は長じて石井君の友となりぬとぞ。又、ミウレル氏渡來し、西京にて演説せられたる言の葉一つ二つ風の便りに聞とめ、此の大人物が左計り幼な兒の如くに聖經の言意を信ずと感じ、身も亦た聖書の教を、文字通りに解釋して一々之を實行せんと決意し、或時は其小遣錢と、治療にて得たる利金とを悉く困苦せる友人

に贈遺したるに、愉快言ふに堪へず、愛は幸福なりとの意義を悟りぬとぞ。又、東京にて民友子が、茅屋の民の友たらんと快ちよく宣言せしとき、彼ほどの人にて茅屋の民の友たらんとせらるれば、余は茅屋だに無き人の友たらんと決心せしこともありぬとぞ。嘗て、今治の信徒、八谷德三郎氏と云ふに會し、初めて聖靈と云ふものを悟り、聖靈は生けるものなりと確信することを得たりとぞ。凡そ一年半がほどは樣々に工夫し、樣々に心苦し、遂に猛然決念して、全く身を孤兒の爲に献ぐることとなりぬとぞ。

除夜の感

名古屋城邊の最と小さき宿りに、明治二十四年の除夜を過す。宿の主人耳うとき老翁は老婆と語り、あすは夙く起きて吾等に祝の餅を食せんと言ふ。同宿の友大方眠り、われ獨り都の人に與ふる通信報告などを調ふ。最后に家族に寄する一書を裁し了れる頃ほひ、時正に四時なり。思へらく、宗教上の議論冷やかにして且つ喧しかりき明治二十四年、官と云ひ民と云ひ、民中の政派と云ふ、惣べて是れ大日本の同胞兄弟見苦しく喧嘩口論し、いや果てに議院解散せられたる明治二十四年は既に過去り、行さき如何あらんと念ひ煩ふに餘りある二十五年は既に來れり。除夜はいと嚴肅に考ふことを得べき時機にして而して世上暗らく入眠れるうちに自づと騷々しき夜なりけり。夜とは言はず、殆んど暗き晝の如し。吾一身本年に於ける歩みは何如あるべき。此の大日本國のゆく先は何如あるべき。さま〴〵に思ひ屈し、偶とまどろむ。覺れば既に五時なり。時迫れりとて早く出立んとする時、老婆起きて、暫らく待玉へ餅を與へんと云ふ。最早時刻うつれりとて一笑し、友と共に木曾川に向ふ第一列車を望みて出立つ。

元旦ありや

木曾川の停車塲より降り、ゆく〳〵數丁にして震災の跡方追々著じるし。災后すでに二月なれど、慘憺たる光景倘ほ依然たり。更に行きて、木曾川の堤のほとりに到れば、新に敷きたる土砂脛を沒す。忽ち聞く、さゝらを以て太鼓を打つ音。蓋し小兒が之を弄ぶものに似たり。余は心に笑みて自ら祝はふ、あゝ此地亦た元旦ありやと。勇意勃々たり。圖らざりき、此は是れ堤防工夫を召集むるの合圖たらんとは。此の邊りには除夜も元旦もなし。工夫工女は夜を日に續ぎて只だ働

らくのみ。男は竹竿を肩にし大綱を引き、連々として幾數百堤の上を行く、女は簇々團集し、間だに四五才の兒を交へ、可笑氣ある歌を寒き唇より發ち、足評子に合はせて丸木にて土を突く、所以る千本づきとて土を叩き固むるありとぞ。あゝ、此地には、除夜もなし、元旦もなし。

九州青年

岐阜の救濟所に五人の青年あり、宇佐八滿宮神官の子にて、宇佐温來彦、早出彦の二人、柳川の人にて池邊春雄、大分の人にて長門武雄、信州の人にて吉澤芝四郎と云ふ、二十二三より十三四迄の年配なり。震災后間もなく馳付け、初めは所々の信徒に冷遇せられたるに拘はらず、能く忠實に働らき、土地の救濟者が得て爲さゞる所ろを能し爲しぬ。夜は秋葉山に祈り、晝は身を忘れて奔走す。余その人と爲りを熟察するに、活氣深く藏して信念面てに現はれ、アツパレ頼母しき方々なり。余は此等の青年に會見したる愉快を忘るゝ能はず。

看病婦

此度の事變に對する吾黨基督敎徒の運動は、殆んど遺憾なき迄に行渡りたり。二十八日の朝た地震ふ。二十九日三十日は既に關西より飯野勝三郎氏關東よりホイトネー氏遣はす所ろの人出張し、治療したり。人々は當時未だ醫者と云ふもの丶必要を覺らざりしとぞ。そは見る限り一面の負傷者にして、負傷は即はち常躰の現象となり、之を療やすなどの考は毛頭あらざりしに、彼人々の來るにおひて、初めて醫者と云ふもの丶入用を知りぬとぞ。又、彼邊の田舍にては世に看病婦と云ふものあることを聞かず、「一に看病」と云ふ諺はありと云へど、看病のみを專門とする人ありとは思はず、况して女性にして此を專門とするものありとは夢にも思はざりしに、忽まちにして天女降り、温平たる愛の手を以ていたはり慰さむる幾多の看護婦に接し、驚ろき喜ぶと大方ならず、女の先生々々と崇めて之を醫博士の如くに尊とみたり。此度の基督敎的運動の中ち、看護婦ほど大ひなる働らきを爲せしものはあらず。而して此看護婦も大方は專門家にはあらず。關東關西の尋常女學校の女生たゞ僅かなる經驗を頼みとし、限りなき愛に勵まされ、奮つて此に馳付けたることそ殊勝と云ふも足らずあるなれ。

小橋勝之介君

余は此度び小橋勝之助君を見ざりしを最上の遺憾とす。君も

久しく大須賀君等の到るを待ち玉ひしと聞けど、其出發の餘りに延引せしかば、止むを得ず一と先歸向せられたりとぞ。左れど、社員藤井米八郎君、之に伴つて岡山孤兒院に、又た播州博愛社に趣き、其間日夜之に親接して、見し所ろ聞し所ろ多し。余、藤井君と車を同ふして京に歸る途すがら、夜沈々、車轆々、隣席の僧侶打驚ろきて耳を聳つる折々、くはしく藤井君より彼の人の事を傳聞したり。何よりも悲しむべきは、小橋君が重き肺病の事なり。特に震災后五十日密柑、薩摩芋、うどんなどにて晝飯を凌ぎつゝ、日夜に奔走せられたる末、病の症烈しくなりぬと承はり、憂ひに堪へず。君は死后、其亡骸をすら世の益に供へんとて、既に解剖の用に獻ぐべきとを遺命せりとぞ、左れど、余は其の壽ち長からんとを切に祈る。君が亡骸の解剖の用は、生ける君が大ひなる働らきに及ぶべくもあらず。君は少ふして樣々の失策ありけるとぞ。常に云ふ、余を救ひしものは第一に基督、第二に母なりと。賢母が君に於ける感化實に重大なりと云ふべし。

孤兒の父母

石井君は將器あり、余深く之を推す。君は謙るうちに毅然たる俠骨を備え、豁達にして、猛然英決す、信仰の強きは意思の強きなり、而も頗ぶる思想に富み、且つ慨然基督教會の爲に許す所ろ見ゆ。君が大垣に到り諸青年と結托し、一と度び大ひに爲す所ろ有らんとせし顛末を傳聞し、而して小橋君が、極めて愼密に之に用心し、人知れず神に祈りして、青年の運動の過激に陷いるとなからんとを希圖せられし趣きを傳聞するにつけ、深く、兩君性格の相異同する所ろを辨知す。救世軍躰の運動は、石井君數年來の計畫なりしとぞ。此度び果して此擧あり、孤兒大擧し、瞬時に一千圓を募集し得たるが、小橋君は寧ろ此類の運動を可とせず、若し斯の如くにして容易に巨金を募るとを得ば、孤兒は自づから之に慣れて黃金を踈末にするに至らんと云へり。小橋君が希望は各所の孤兒院を連合せしめ、健兒は北海道に、農者は播州に、學ぶに堪ゆる者は東京にと云ふが如く、孤兒を各地に分配せんと云ふにあり。此精神をもて率先し先づ第一に犧牲となりて、博愛社全躰を岡山孤兒院に寄附したるなりとぞ。石井君、小橋君、兩者相たすけて完備の事業擧らんとす。共に重んずべき方々なり。藤井米八郎君は、震地傳道隊の一人として趣むき、專

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ばら孤兒の爲に働らきたるが、今や名古屋に震災孤兒院出で來、大垣に貧民授産の爲め自助會出で來、傳道隊の人々は旨として各所に巡回傳道するに至りしかば、此度び辭して余と共に京に歸る。

震因愚見

車の上より見渡すのみなれば、精しくは知らず、たゞ一面に視察したる限り、此度の震害に不思議なる一つの現象あり、即はち地割れ土裂けたるは、主として堅き土地柄のみにて、田畠の如き軟かき地に毫も變りなきの一事是れなり。地震の原因に付ては樣々の説ありと云へど、未だ地の内外に於ける電氣の影響に歸するものあるとを聞かず。左れど余は上述せる現象よりして頗ぶる此類の假想を懷き、識者の研究を要むるの念あり。

汝が志望を告よ

前號に掲げたる「歳暮の感」を問ふと同時に「汝が志望を告よ」と云へる問を與へぬ。答へ多かりしうちの、三つ四つを左にかゝぐ。

其一

道念を高ふし良心を發揮し學び得たるの總べてを以て父母に孝をつくし高恩の万一をも報し併せて社會に有益ある即ち天より授かりし明德を以て社會を利し以て其時弊を矯正して天賦の本務を盡すにあるのみ即ち犧牲獻身以て天職を盡さんとを望む。

其二

妹は熱信ある祈禱に神の御助あるより正しき道を歩み眞理と愛に淸き人となりて世のために幾分にても益ある働をなし神の榮えの現はるゝ働きをなし度思ひ居れり。

其三

曾ては傳道の樂しみが我身に神の望み玉ふ如くに思ひたるともありしかども規則の改正になりしより敎育の樂しみを曉り敎育の方遙かに樂しみになり參り候然れども大勢人の集り居る所は好しからず山里にて側らには木々の茂りたる所なり又小川の流れなど あるところにて あしたには早く起きいて山に行きて祈りしまたは飾りなきけしきをながめて心を養ひ其の處の人々が畑より歸り小川にて足洗ひ夕餉も終りたる時

に集まりて其人々に受けし敎へを分ち得たしとかゝる生活はいかに樂しからんなほ心知れる友と共ならば如何に樂しきかなど其處の目に見るが如くに思はれ候されども種々なる關係をおもへばこれも神が望み玉ふところとたしかに定めがたく此の年月敎育を受けつゝも確かなる志望もなきを心苦しく感ずされどもなきものは詮なく猶敎を受けつゝ神の望み玉ふ處を確かに知り私を狹むなく受けし務をば全ふし得度と望み候。

其四

志望は種々あれども其中にて最大なる妹の志望はいとも〳〵をこなる事にて己の足らざるをも省みず愧かしき限りなれども心に思ふまゝを左に記すのみ我家の中にて最も初めて神の敎へを授けられしは妹なり我郷の中にて最も初めに神の敎へを授けられしものも妹なり妹少なくも我家我郷に神の敎へを分つべき天職を有するものと確く信ず此の職を全ふするは實に妹の最大志望なり又た彼の學ぶべき餘暇なき人々を其都合よきをりに集めて己の敎へられし事を及ばずながら彼等に分たんとをねがう是等の志望を達するには必らず神の助け玉ふとを信じ益々己を磨がき道に進まん事を常に祈禱す。

親に後れたる後の述懐

（其　二）

すゞ子

（四）。此日は朝より雷絶間なうなりはためき雨さへはげしく降みだるゝ見れば世に在し程身にかへて人のこと思ひやりたまひし亡人の心には賤の男が待ちあこがれし恵の露のうるほひを中々に嬉しとや見たまふらん片田舍の事なれば野べ送りの道すがら足の運も殊の外はか〴〵しからずゆかり薄き人々は怖ろしなど逃げまどふめれど我れのみはいとゞ心に感謝する之荒し男がふり上間鍬のひらめき三つ五つ稻妻にまがひつゝ篠つく雨の中に見えて惜しきなつかしき亡きがらの宮はあはれ祖母君埋め奉りし右側に隱れぬ世にあらん限り思出の泪手向てありし恩み忍びなんをくつちぞこれある。

（五）。數多つどひしうからやからも漸々に立わかれ行くまゝに母上と共に亡ひとの事果つる離の家に忌にこもれば暫が程はとひ來ん人もと絶て淋しさ譬へなし母上の心慰め聞んとてはかあき草花ども折はやし來て花がめにさしなどすればなき人

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の詠め給ひし昔し思ほしいでゝかへりては泪の露そゝぎ給ふなり起ゐにつけてそこらのあはれに廣々しふて母家などに事なく居てふと立かへりては何故父上のおまし見えぬにやと忘れては思ひし事も幾そたびなりし日頃愛で給ひしふみどもつれ〳〵のまゝに取いづれは詩の書などにぞ水莖の跡は殘れる昔を今にと歌ひけん古人とは事かはれどくり返さまほしき世に立かへりつれ〳〵思ひ回らせば父上はげにクリストを知で過ぎ給ひぬいな時期は君をして直接に救主と認めしめ奉らざりしも必ずや主の忠實なる僕なりしを思なりそは明らかに神の子と信じ給はざりしも姿をかへて知り給ひしは行のあかしするを見ればなり常に天地を恐れて古の聖の道をしたひ義にいさめる心持ち給ひしは誰もゆるす處なりかつや生れながらに孝の心ふかく我生れし前年祖父君に後れ給ひしも殘れる母上にはいとよくも仕へ給ふかなと幼心にも思ひしこと今も覺ゆるゝ一年風暖かき春の暮れ花は梢を離れつゝ綠の若葉四方に滿ちながめ長閑けき頃なりけり祖母君を助けまゐらせ十にもたらぬ我とわが姉上とを伴ひて曉ふかく家居をいで伊勢の大宮にまふでさせそれより西の都難波津の名所舊蹟を打廻りて早くより望み給ひし祖母君の心ゆく樣かつ慰めて道すがらもくさ〳〵の物語り聞かせ參らせ漸う大和路にかゝり奈良の都のいにしへを忍び三笠の山春日野の原ありとある樂き處々打めぐりびは湖の波に掉さして石山の景色をさぐるなど老樂を極めさせ奉り給ひぬ其程の心盡しや如何計なりけん祖母君はかくて三年にして世を去給ひしも事々につけて此旅のたのしかりし事をいひいで給ひこよなく嬉敷とは思ひ給ひし樣覺し。

（六。）父上は我等の如く物足りゆたかなる中に人となり給ひしにあらずされど幼きより嚴なる祖父母の君に育てられ給ひて十二歳になり給ひし歳よりあきなひの重なる事は大方祖父君に敎られて書き給ひけるものども今も猶殘れるなり其頃の事なれば學ひの道いまだ開けずわけて商を以てすぎはふ家の習ひとて書讀む事などはさしも人々のもてはやさぬをひとり深く志し給ひて千々に心を碎き給へどよき師とてあらねば近き邊りの山寺の法師に暫し敎へをうけ給ひしとぞ家の老女などの折ふしに付けていひ出るなり口さがなき人々のそをめづらしきことにおもひてよしなき事いひふるゝを祖父君のいたく

心に煩はしふおもひ給ひて止め給ふともまゝありしかども中々に心くじき給はざりしとぞされど祖父君も漸う年老ひ給ふまゝに今は家の事打捨てゝも置かねつゝ年月と共に漸う規摸をひろめ昔しに似ぬ家の様とはなりぬそれさへあるに數多公のつとめにかゝづらひ給ひてこよなく御身を勞し給ひしかばさて社明治十八年といふに肺膜炎てふ病ひにかゝりて一時は醫師も匕をなげて取かへすべくも見えざりしが神は猶すて給はずふしぎに命助かりて三月斗りにてやゝ元の身となり給ひぬされども今はもはや世の事にあづかるべきにあらねばとてすべてを一人の弟にまかせて心長門に引籠り專ら慈善のとにのみ心をかたむけ路、橋などのくづれたるをば人知れず取つくろはせ貧しき人をにぎはすなどをこよなき樂しみとはなし給ひぬ。

（七。）父上世にゐ給ひし程にふかく好み給ひしは棋うち書よむ事どもなりし病にかゝり給ひし後はわづかの道も心の儘にゆきかひし給かねてたゞ靜にこれらの事につれ〲をやり給ふとのみ事とし給ひしが此度びの事ある前二月計りは何事も面白からずとてそゞろにつれ〲を感じ給ひしとなんまた器具などをふかく愛で給ひて集め給へる者數しらずみな一つじに御心こもりし者と思ばぬりごめの中いとゞ床敷ぞ思ほゆる。

（八。）父上の常に口にしたまひしは求めて來る名利はかひなしとの一言なり片田舍とはいへど何故にや人の心殊の外すぐよかならずわけて利を求めてあかざる習はしいとゞしく盛んなるまゝに會ま慈善のわざを口にする人あるも心の奥は報ひを望みて面白からぬあたりの様見そなはしてはいたく打歎き給ふこと多かりき。

（九。）凡そ人は其身の位置有様の高うなり行くと共に心まで伴ふが大方のよの常なれど父上のみは此邊に深く心を用ひ給ひけんめしたまふもの身につけ給ふもの一生の間一度びだに此事によりてことの給ひしを聞かずすべてひとの捧るまに〲うけ給ひひたすら節儉をむねとし給ひぬ常に子供らを集ていひ給ひぬ義により人の爲ならば千金も惜むなかれ益なき事には一厘も愼みてな費しそとまた尤も秩序の人にてぞおはしける一年のすべては床にのみ打ふしゐませどそが中に家のよ大かたは心得給ひ年のあしたにことしの暮はかくあらんといひ給ひしことのひとつもたがへる事なかりしも不思議なり。

（十。）我父の子に對し玉ふや無言の中に教育し給へりはらからの中三人までは父上に書など教へを受しものなかりしが我身のみは漢書など一卷二卷いとま毎に教へられしが今よりは物覺もよかりし故にや思ひの外に樂みなりとて心にとめて導き給ひぬある時は人にたのみて手習ふべきよすがもとめ給ふなど姉上の得知り給はぬ幸を得てしがつひにかくなるしるしなりけん我身漸くに年加はるまに學びの道のたのしさを知り出でゝいかにしてかと思ふ心切ありしも田舍にたぐひまれなることゝてゆるし給はずたゞ兄上のみわが心を推計りて父上にすゝめつひに今の身とはあるを得たりそれより後はひたすらに歌ものがたりの道にすゝまんとをのみ望み給ひふみの折々に此事に付ての御詞の見えぬはなかりき一歳一度の夏のやすみも家人は物事に紛れていまだ思ひ及ばざる程より父上のみははや指折かぞへて待ち給ひつ歸り來らば何の書を讀ましめなん呉の理を說かしめんとて机を拂はせて己れが枕べにすへ書を集め傍らにつらねさせかくて我歸り行く數日の前より父上の寢室ははやくも我がふみよむ室とはなり居れり一歳のほどに書きて捧しふみどもはいつもかたへの物の中に納めて離し給ひし暇なしとぞ母上は語り給へりわづか二ヶ月のやすみの程はまことに母上にかはりていたはり奉りあがき程の不孝をわび奉るの日なかりしを如何にぞや今年はたゞ十二時間傍に侍りしのみにてしかも永しへに我をすてゝ去り給へり嗚呼慈愛深き我父上はわが世の務はてゝ永き休みに入らん日を樂しき國にて待給ふらん。

隨感

○元日　　花圃

としたちて一日二日は手まりすら
　手につかぬ迄うれしかりけり

かくおさなきほどによめりし心は今もかはらず、何となくみるとみるもの、聞と聞もの、のどかにてうれしくぞおもはる、まことやけふといへば罪に染み、心汚れし身も、清しく、心きよらかに成はてし心地す、この日は夜盗おしとぞ老人のかたり傳へしもうべとぞおぼゆ、いでやわれ人ともに、こぞの事ども悔おもはゞ、こぞしだに安く、心きよくて過してし

が如、日新の教も他なし、たゞ〱ひたすらに月日ふるにしたがひてこの心忘れざらん爲、けふの一日に一年のあらましは計りおかまほしくてなん。

○叔父を弔ふ

在故山　方寸子

叔父大學に在り、孜々螢雪の苦學、明年七月業卒へんとして、玆夏肺患に罹る、温良恭儉の人、命なる矣夫、斯人にして斯疾あること、中頃ろ少しく癒へて、房州天和ぎ海暖き邊りに養ふ、久ふして音信を聞かず。

　北風、一夜、越山寒し、
　半宵、夢無うして房州を憶ふ、
　逈かに聞く行雁の南天に向ふを、
　起て窓を排けば、月、影を曳ひて細し。

忽焉として凶報あり。旻天有爲の才を惜まず、空しく青雲の志を懷て遂に異郷に斃る。時維れ明治廿四年十二月二日、享年二十七。遺骸は火かれて、十一日の夜故園に入る。大學の服裝、累々の書册の側ら、錦衣を見ずして白木綿の包みを見る。線香の煙り細く昇りて、何事ぞ念佛の聲を曇らす。十三日、天晴れ風暖かにして胸最も寒し、棺に尾して何處にか往かん。

　螢雪、青雲を望む、
　人間、蹉跎を奈ん、
　英魂、千秋の恨み、
　今夜、何れの處に迷ふ。

○先づ心を修めよ

川合信水

事業を成さんと欲する者、徒らに外界のみを觀、人物を硏かんと欲する者、偏に言行にのみ注意す、是れ古今の通弊ならずや、蓋し事業は外に在らずして中に在り、人物の修養は言行の末にあらずして根本の心にあるなり、孔子曰く「欲修其身者先修其心」と、心誠に美ならば、其風采も、其言行も、其事業も、凡て自然に美なるべし、基督嘗てパリサイの人を警めて曰く「あゝ蝮の裔よ爾曹惡にして何で善を言ひ得んや夫心に充るより口に言るゝ者なれば也善人は心の善庫より善ものを出し惡人はその惡庫より惡ものを出せり」と、吾人は聖書を繙き、基督の權威ある言を聽きて、其超自然の行を見て、又其敬畏すべく、嘆美すべく、崇拜すべき風采を見て、其心の如何に美くしかりしかを想像するなり、神の子の事は暫く

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

措きて、彼のステパノの人物を觀るに、聖書は記して曰く、

集議所に坐せる者みな目を注て彼を見しに其面天使の面の如くありき

と、又彼の多くの人の愛讀する三國志を看るに、玄德趙雲の相遇を記して曰く、

……玄德も心の中に趙雲が人表よの常ならざるを敬ひ趙雲も玄德を見て實によき主君かなと思ひ此より互に捨てざるの意あり

又關羽が客舍讀書の樣を叙して曰く、

……胡班忍びやかに伺ひ見るに關羽左の手に長き髯を握り几によりて燈の下に書を觀居たる氣色よの常の人ならずと驚きければ覺へず感嘆して是は天上の人なりといひけるが……

嗚呼此等の人、豈其心に養ふ所のもの、自然に、我知らず、外に形はれて然るにあらずや、希くは吾人をして本末を誤らしむると勿れ、主客を顚倒せしむると勿れ、心は本なり、中は主なり。

家政

食物店

次郎

夫も妻も共に外出して仕事を執るとなれば、食物を外にて買ひ携さへ歸りて其まゝ食用すると便利となる。且や、食物改良の策容易に行はれず、習慣なか／＼に制しがたく、料理の方兎角に改ためがたきものなれば、夫此の故をもて、食物店と云へるを起し、一種の新工夫をもて調理したる食物を、成べく安き直段にて賣るの工夫あらば面白からん。

此等の主旨により、米國ボストンの都に、ニウイングランドキッチエンと云ふもの近年出で來たり、學術上の道理を實際に適用し、價を安くして滋養分を多くしたる食品を工夫し、下等の人に益多き食物を食べさせんとするの主旨なり。

わが婦人衞生會にても、試驗の爲め料理の會あり、追々試驗發明せられたる向もあるべし、そは追々世に公けにせらるべきものと信ず。

衞生家並に家內經濟學などに注意する人々は、折々新工夫の料理を考がへ、世の主婦を益し、下は下等人民の滋養收入を

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

増し玉はんことを望む。

物の直段は味のよしあし、養ひ分の多少などと平均するものにもあらず、されば式部は鰯の爲に借しみ、今の書生は薩摩芋の爲に慷慨す、此等のもの價安きを以て人は輕ろんずれど、其味と其養ひとを言はば、決して卑しむ可らず。

故に、價安く、味よく、養多きものを撰み、食物調理法を改良して、日常の食品に一大進歩を與ふること肝要なり。

第一の改良法は、煮しめ屋に注意を寄せ、今ま一ときは面白き菜を賣らしむるにあり。之れ必らずしも六かしきことにもあらず。

批評

○博愛雜誌

播州の博愛社、岡山孤兒院に合併したるにより、彼の博愛雜誌は第二十號を以て廢刊することとなりぬ。其辭に云く、人の進むや未初より退くが爲ならずんばあらず、我の退くや未だ初より進むが爲ならずんばあらずとは、此豈昌黎韓氏の語にあらずや、而して吾人は今實に進むが爲に一歩を退くの止むなき場合に遭遇せりと。

○ユニテリアン

ユニテリアン教は基督教なり、否な基督教にあらずと。かゝる議論騒がしく、今のユニテリアン教徒二分せんとするの傾向ありと傳聞し、驚ろくべきことと思ひ居たるに、「宗教」第三號の社説に、ユニテリアン教は何如なる意味に於て基督教なりやと題する一文あり、マッコレー氏の筆なり、極めて調和的の筆法を以て論じて云く、

ユニテリアン教の基督教たる所以は唯基督教を以て宗教中の最高者なりと認定するユニテリアン教徒の自ら之を解釋するにあるのみ、……余輩は日本の美土に於て佛教徒も孔子教徒も基督教徒も共に天父なる宇宙の上帝を愛し同胞なる凡ての人類を愛し凡て其道理心と感情とによりて完全なる眞實と正義とを確認し共に與に一大結合する時の一日も早からんことを希望するものなり。

左れば、ユニテリアンは一定の宗教にあらず、一定の宗教に達せんとする研究者あるべし。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○万國婦人禁酒會第一惣會報告

去年十一月十日より十九日迄で、米國ボストンに開きたる万國婦人禁酒會第一惣會の報告は、書記、クレメント、レビットト夫人の手にて成る。その恵送によりて展き見るに、内に日本の部の報告あり。蓋し、レビット夫人が自ら辨ぜられたるものあり。之を本號表紙の裏面に轉載す、今の婦人矯風會最初の發起人が、故木村鐙子の君たるを知らざる人多し、今此の公平なる好き記臆者の口を以て万國の大會に其由來の公けにせられたるを喜こぶ。

○誕生日

德富猪一郎君の編纂にして、西洋に多きバース、デーズ、ブツクに倣ひたるものなり。ホームの樂しみ、友誼の親しみを増すには、益する所ろ少なからず。好き趣向の追々我國に移り來るを祝す。

○漢城之殘夢

井上角五郎氏の著なり、もし獄より出でたる頃の井上氏をして此類の著書あらしめば、更に一層の密事を聞くとを得たらんに、今の涿園子より之を聞んとするは難し。左れば、巻中之と云ふ新らしき記事なく、宛から殘夢を談ずるに異ならず。但し竹添公使、王を宮殿に還すの條り、朴泳孝長歎して孺子敗事と慨せしの記事は、今も尚ほ讀者を激するに足る。

○自由黨宣言書

自由黨々報は、號外として宣言書を發す、滔々數万言、激烈にして痛快なり。其の一百八十万圓の炭礦鐵道を十ケ年賦三十五万圓にて薩に拂下げ、神戸造船所は十万圓にて川崎正造に拂下げられ、正造は直ちに六十八万圓に賣拂きたりなどの事實十餘を列擧し、一々明治政府の信ずるに堪へざるとを宣言したり。

「小公子」結尾に付
近々の内に
若松しづ子再び着筆し
フラワー、チフ、ゼ、フハミリー
の譯文を引續き掲ぐべし
此度の主人公は姫君にて
小公子に對する双美の伴侶たり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

時事

○何日か撰擧日なる

官民互ひに自黨の議員を出さんとするは可なり、但だ其の戰ひ須らく公明正大なるべし、而して戰の公明正大を期するの第一着は、速かに撰擧期日を定めずんばある可らず。自黨の準備正に成るを待ち、突如として、○により之を示定せんとするが如きは、卑劣不良も太甚しきもの也。

○民友子と中島前議長

民友、國民は同一脉也、而して彼等が中島議長を傷つけんとするは、何かの趣向あるが如し。彼等年々同じきことを繰反せり、もし左程信ぜずば何ゆへに鼓を打つて責めざる、陰柔無責任の語を放つて而して平民主義の代表者なりと云ふとも、何人か信ぜん。夫れ、九州は必らず大日本に非ず。

○井上角五郎氏の辨

世上近來切りに井上角五郎の辨を賞す、如此き輩は眞雄辨の何たるかを知らざるもの也。デモスセン、ヘヌリー、ウエブスター、皆云へり、辨は德に合せずんば雄なること能はずと。然るに無節操無德義の人にして何をもてか雄辨を揮ふことを得ん。日本近時雄辨なきや久し、たま〳〵角五郎輩の詭辨を聞て感服するに至つては、悲歎何ものか及ばん。

○實業家

實業家が議員となるは當然の事なり、然れども、御用商人は決して實業家にはあらざる也、彼等は當然なる商算によりて利を得るものにあらず、彼等が二一天作は五にあらずして十もしくは二十なり、其算數例外あり、如此き實業家の實業談は、主計學校幼年生の説法にだも尚及ばざる可し。夫れ、今の日本に於ては未だ實業家を撰出するに及ばず、眞正の實業家は迚も議院内にて發言せざるべし。

○時事翁

時事翁は、解散后俄然論調を變へたり。民黨の失策言ふが如く一二日の中に增したりや何如ん。記者希はくは、實業家を撰出せよと惣論する勿れ、寧ろ慶應義塾派の人物を擧よと言へ、吾人は之を擇ぶ。記者が圓滑なる説法により、意外の御用商人を多く出さんことを憂ひとす。

問答

可愛子

●問。關東と坂東とは同じ事にて候や如何。（名古屋望天生）●答。逢坂より以東を關東と稱へ、箱根より以東を坂東と稱す、と續和漢名數大全に見へました。

●問。齟齬といふ字の意義を伺ひ度候。（佐渡愛讀生）。●答。齒のくひちがふた貌です、これに因て物のくひちがふとに用ひます。

●問。女學雜誌と女學生とに見ゆる山月子、如是子、淸流子。すゞ子等の實名御知らせ下され度候。（越前北流生）。●答。いづれもマダ實名をお明かし申すとは出來ません。

●問。六親とは何を指し候や。（本所綠水生）。●答。老子の注には父子兄弟夫婦とあり、前漢書の注には、父母兄弟妻子とあります。

●問。佛法の初めて日本に入りしは何年頃なるや。（大阪雲遊居士）。●答。欽明天皇の十三年、初めて佛法が百濟より我國に入りました、支那に後るゝと四百八十六年で、釋迦の滅後から此に至るまで千五百一年を歷ました。

●問。昨年の附錄女學に出ました「ひさご女史」の小說「車の轍」はまだ殘り有之候や。（甲州ゆき子）。●答。まだあります。

女報

可愛子編

●勳章親授式　皇后陛下は昨年十二月二十六日午前十一時、閑院宮御息所智惠子どのを宮中に召され、勳一等に敍し寶冠章を親授せられたる由に承はる。

●王女降誕　能久親王殿下は昨年十二月廿四日王女を擧げさせられ、信子と名け玉ひし趣。

●皇太皇后行啓　去る三日は元始祭にて、皇太皇后陛下には右御拜として宮城へ行啓あらせられしよしに承る。

●同陛下　には御年賀のため去る六日午後二時三十分御出門、宮城へ行啓あらせらる。

●松方伯家門の繁昌　伯は本年五十八歲、夫人政子は同く四十八にて、その間に令息令孃總て十有七人を擧げたり、令息を巖、正作、幸次郞、正雄、五郞、寅雄、乙彥、正熊、義助、金次郞の十四名とし、令孃を千代子、ひろ子、鶴子、みつ子の四名とす、此外に猶ほいく子、金熊、十一郞の一令孃二令息在せしかど、前年病によりて沒りぬ、巖君は目下獨逸公使館に、在任又は留學し、正作君は白義の大學校に、正雄君は米國ヒラデルフヒヤの大學校に、幸次郞君は一昨年九月學業を修めて米國より歸朝せり、又令孃千代子は武笠鐵道廳技師に嫁し、昨年一月一日長女初子を擧げ、又た客臘廿九日一男を擧げしと云ふ、伯の父君並に母君は早く沒し玉ひしが、伯爵夫人の母君は高齡七十有五に達し今猶ほ鑠鑠たり、伯は子福者を以て稱へらるゝのみならず、家庭教育の上に就きても世人の賞賛を引くもの少からず、三男幸次郞君が生長の頃迄は綿服の外假りにも絹布の類を纏はしめず、極寒と雖も決して肌着と足袋とを着せしめざりしよし、是はその柔弱に流るゝを防ぐの意に出でしものなるべし、此一事を以ても家訓の嚴肅なること推すに足れり、殊に敬服すべきは伯爵夫人にて、三十年來今に至る迄、伯の膳部に上る三食の調料は夫人自ら之を調進し、決して他人の手に委せしとなく、每夜寢に就かるは夜の二時より早き事なく、而して每朝六時には必らず寢所を出づるを例とせり、寢に就くの遲きは、一は伯許りへ更闌くる迄來賓有るが爲にもよるべけれど、一は又た家政取締上に注意せらるゝに因れりと云ふ、夫人は日夜伯の幸福を祈り、子女の教育を樂まるゝの外曾て一事の遊樂の好むもの無きものから、伯は流石に乘馬を以て無二の樂とするをもて、現今厩舍に飼ふもの都合八頭に及び、其中小櫻（仙臺種）、千歲（薩摩種）等尤も駿馬にして、且伯の愛する所たり、其他には畫を好まるゝ趣きなれども、近年國政多端の爲め衞幅など展覽すゝとは絕へてなくなりしといふ。（朝野新聞）。

●明治女學校幼年科　は設立せられたり、委細は廣告欄に就て見るべし。

●大日本婦人衞生會　本日午後一時より麴町區一番町十二番地（岩佐病院隣）同會附屬保育園内に於て例會を開く、演題講師は（演題未定）加藤弘之氏。（震災地の實況に就て）松本三郞氏。（演題未定）朝山義六氏なり。

●ラーチッド氏夫人　京都同志社教師ラーチッド夫人は、日本に來りてより十六七年間、始終心を一にして夫を助け、今日に至りしーが、不幸にも病魔の犯す所となり、療養として本月四日橫濱出帆の便船にて歸國の途に就かれし由。

●震災孤兒慈善音樂幻燈會　去る五日の夜山梨縣甲府柳生町舞鶴館に於て催されたる慈善音樂幻燈會は有志の婦人が罹災の孤兒を救助せんとの目的にて企てられしものにて、同夜は京都東京松本より赴きたる西洋人が、同地に在る外國婦人と共に、面白き歌を連唱してオルガンを奏し、又同市の石原風琴、里見染糸、岡安喜三次代、市川柳巴、芳村芳三郞、山本竹玉等の人々も囑托されて琴、胡弓、尺八、三絃、等の合奏を催し、月琴は彼て有名の樋口桃溪氏の一連が秘曲を盡して此催の興を添え、又東京より聘に應じて赴きたる我社員星野愼之輔氏は震災地の實況に就て有益なる演說をなし、頗る盛會にてありしといふ。

●兒女の龜鑑　と題して、昨年十二月二十三日の鹿兒島每日新聞に出でたるを見るに、町田とよ子外三女子より慈善音樂會への書面を載せたり、四女子とも孰れ

も未だ十三歳位ひなる人々の由にて實に殊勝なる心懸けと云ふ可し、日増寒冷相加り候處各様方御揃益御壯榮之段奉恐賀候陳者妾等昨年十二月十六日鶴峯神社へ參詣の路次千石馬場通り鎌倉氏門前に於て壹圓銀貨壹枚を拾得候に付天神馬場巡査交番所へ差出置申候處一昨日にて滿一ヶ年を經過せし由にて銘々へ御下渡相成度候就ては此金幾分宛を愛知岐阜兩縣震災地へ義捐致度相話居候處御前様方發起者として慈善音樂會御企之由拜承仕至極同意致し依て聊か義捐の心組にて特別券拾五錢宛を御買申度存念に御座候間右微意を御汲取御交附被下候へは大幸の至に御座候草々かしこ

十二月十八日

町田さよ子
嶋津くら子
土持ふて子
橋本かつ子

野守みれ子様
福嶋よれ子様
有川こう子様

●女鑑＝松井の妻　と題して熊本忠愛新報に出でしを見るに、人吉九日町字札の辻松井峰八と云ふ者あり、恒に旅人宿を以て業とし、妻を佐壽と呼ぶ、當年四十有八歳節婦の名あり、峯八性義俠にして且つ慈なり、年壯なるに及んで以來、苟も人の困厄を聞けば則ち走つて之を救ひ、而してその親疏を問はず、動もすれば家產を傾けて人の急を助け、而して毫も惜むの色なし、故に生計日に衰へ、心なきもの却つて之を世話燒の峯八と呼ぶに至る、然れども佐壽以て意に介せず、益々夫の義俠を賛けてその意を鼓舞し、亦た堅く婦道を採つて少しも怠らず、峯八恒に家に在ること寡く、動もすれば二旬三旬にして猶ほ歸らざること往々あり、然れども佐壽之れが爲めに怨言を吐かず、身を擔んでゝ家事に當り、其の狀會々以て丈夫を耻かしむるに足るものあり、僕婢を見ること子の如く、常に慈仁を基として之を遇す、故に僕婢皆なその業を樂んで日夜懈怠の色なく、主家の夫婦を見ること亦たその父母の如し、於之乎家政日々に理まり、生計漸く饒かなり、語に曰く積善の家にに必ず餘慶ありと、甘哉言、嘗て流落救ふべからざる家政をして今日あらしめたる者職として夫婦積善の餘慶に出でざるなしと雖も、就中佐壽の如きは克く婦たるの道を盡くしたるものと云ふて可ならんと。

●善婦賞與　茨城縣豐田郡水海道町亡野村半藏妻ハルは、今を距二十四年前半藏に嫁き、能く夫及舅姑に事へ、去る明治十五年舅は中風症に罹り癒へずして遂に一昨年十一月死亡し、姑は是より先十六年中病沒し、夫亦尋て難症に罹り昨年一月死亡したりき、ハルは元來溫良の性質にして、貧窶に在れども看護怠らず、且つ二男一女を養育し曾て孝貞慈愛の道を欠きし事なく、殆んど十年一日の如きは實に嘉みすへき行爲なりとて、賞金二圓昨年末同縣廳より下賜されたりと云。

●師範學校女子候補生　長崎縣師範學校に於ては昨年末より左の方法により、女子候補生三拾名を募集するよし、

女子候補生應募者心得

女子候補生は女子三十名とし各郡市より募集するものとす○候補生は本縣內に本籍を有するものにして凡そ高等小學科卒業若くは之れと同等の學力を有するものとす○候補生は齡十五年以上二十年以下(明治廿五年四月の計算による)のものに限る○候補者たらんことを望むものは左記の書式により來る廿五年一月十七日迄に願書を差出し同十八日より當校に出頭体格檢査幷に學力試驗を受くるものとす但し体格檢査及學力試驗の科目(高等小學校の教科目)方法等は概れ當校入學試業準則によると雖學力上に關するは及落制限は大に斟酌することあるべし○候補生は人員二十二名以內校寄宿舍に止宿せしめ其他は當校近傍に父兄若くは慥なる親戚あるものに限り通學を許し當校生徒たるに必須の學科を研究せしむ○候補生は來學年に於て當校女生徒募集の際郡市長の薦擧に應ずるか又は自ら入學を願ふべきものとす○候補生は來春當校に於て募集する生徒と共に學力を試驗し合格の者は來學年の初めより假入學を許可するものとす但し合格者募集定員に超過するときは優等のものより假入學を許可すべし○候補生は研究の爲めに要する書籍等左記の通り携帶すべし一高等日本讀本、一皇朝史略、一小學理科讀本、一其他研學に要する筆紙墨等、候補生は時候相當の通常衣服、理髮具、雨具等を用意すべし尤も机及寢具は當校より貸與すべし但し衣服は絹服を着用することを許さず、○候補生中當校寄宿舍內に止宿する者は食費一日に付金七錢九厘幷に炭油費等一ヶ月に凡そ金拾錢を自辨すべし○候補生中不品行のもの若くは言行擧動等當校生徒たるに不適當と認むるもの及學力不進のものあるときは臨時候補生の名義を削るものとす、(候補生志願書式略)。

●女子の卒業　鹿兒嶋市高等小學校に於ては、既に多數の卒業生を出し、尙ほ年々二十名內外づゝの卒業生徒あるに拘らず、未だ一人の女子卒業生を養成し得ざりしは誠に遺憾の至にて、常に當局者の心頭を煩はす所なりしが、昨年十二月廿一日に於て漸く一人の女子卒業生を見るを得たり、万綠叢中紅一點と云ふ可し、扨て當日の光景は門前に國旗の高く飄るあり、講堂にはオルガンの優しく響くありて、最も嚴肅に最も盛大に、證書授與式の典を擧行せられたりき。

●俳優比翼鑑　と題して讀賣新聞に見へたるを左に記さん、

團十郎　妻ます　山谷八百善の娘分
菊五郎　妻さと　柳橋の藝妓福松
左團次　妻かれ　柳橋の藝妓お花
高　福　妻きみ　西京の藝子君遊
壽三郎　妻かれ　金春の藝妓中村屋かれ次
家　橘　妻さみ　柳橋の藝妓おさみ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

時藏　妻かめ　猿若町二丁目萬屋吉右衛門長女
小團次　妻さよ　霞町の藝妓おさよ
壽美藏　妻さら　名古屋の女俳優寅次
八百藏　妻くつ　仙臺市の藝妓屋女主人
傳五郎　妻たみ　溝口藩士松井源助長女
勘五郎　妻たみ　芳原大文字樓の娼妓喜蝶
松之助　妻きみ　市村座主中村善四郎次女
芙雀　妻うめ　芳原品川樓の娼妓梅ヶ枝
芝翫　妻みち　芳原仲の町引手茶屋尾張屋五兵衛長女、
秀調　妻さき　西京祇園新地の藝子小里
新藏　？はろ　柳橋の藝妓春吉
松助　妻ゑい　京橋南八丁堀斧丸の養女まき
鶴之助　妻まさ　横濵太田町時計屋渡邊商店の長女
猿之助　妻こさ　芳原京町二丁目貸座敷中米樓娘こさ
芝鶴　妻さよ　芳原江戸町一丁目貸座敷大文字樓娘さよ
片市　妻けい　金春藝妓けい
訥子　妻はろ　今戸有明樓の弟伊東竹次郎の娘
九藏　妻みつ　名古屋市の女俳優小光
駒之助　妻こう　大坂の藝子松本屋こう
我童　妻さき　大坂藝子おさき
我當　妻やす　芳原金瓶大黒の娼妓今紫
苙次郎　妻かれ　商家の娘

●英國皇太孫の婚儀　ルートル電報に曰く、皇太孫アルバート、ウイクトル親王の婚儀は來る二月廿七日執行さるゝに决せり。

昨年末廢娼記事

◎福井縣通信　◎娼妓賦金　二十五年度福井縣の娼妓賦金豫算は九千四百六十七圓なりし。

◎福井縣にては此迄廢娼の建議を堤出したる議員尠からず、然るに常に少數にて失敗せしが、昨秋府縣制實施に際し同制に依り撰出したる議員を以て組成したる縣會にては、更に廢娼を唱ふるものなく、有志者は何れも失望し居れり。

●山梨縣會にては甲府下町藝妓移轉の説起りぬ。

●福岡縣會にては十二月二十五日、藝妓の住居地は限らざるも、營業塲所は其區域を定めて許可することになり度、との主旨にて縣知事に建議するの説は、大多數を以て可决せり。

●新潟縣會にては十番議員土田橘十郎氏の動議にかゝる廢娼の建議、十二月廿二日議塲に提出せられたり。

品名	一月七日
白米（一円ニ付）一等米	一斗〇升〇合
二等米	一〇二
三等米	一〇五
四等米	一〇八
五等米	一一三
正米（一円ニ付）越中米	一斗四升五合
尾張米	一四一
南部米	一五三
磐城米	一四三
忍領米	一四一
雜穀（一円ニ付）本貫大麥	二斗九升五合
上州小麥	一八五
竹林麥	一八五
梅澤大豆	二〇八
青柳大豆	一九〇
吟小豆	一六五
白胡麻	一一八
黒胡麻	一五五
鹽（一円ニ付）赤穂	俵三、四〇〇
大鹽	三、五〇〇
本齋	五、四〇〇
新齋	六、〇〇〇
醬油（一円ニ付）最上	樽分厘 七四 七九 八七 一、一〇 一、二七 一、五七 一、七二 一、九〇 二、二〇 二、五〇
極上	
上物	
中物	
並物	
味噌（一円ニ付）地製上白	貫六、八〇〇
同上赤	六、八〇〇
同紅赤	四、三〇〇

品名	一月七日
絹糸（一円ニ付）本練花色	二六〇匁
同色物	二五〇
同羽二重糸	二四〇
延糸太筋	三三〇
芥子糸	二九〇
同湧色	二四〇
極天色物	三三五
色物太練	二五五
器械糸	四五五
毛糸（百斤ニ付）鶴印	一〇七円、〇〇
青紙印	一一二、〇〇
スコッチ四本撚	八二、〇〇
同並物	七〇、〇〇
同三本撚	八五、〇〇
同並物	七〇、〇〇
舶來中細	一一五、〇〇
同極細	一二〇、〇〇
木綿冬縞（一反ニ付）伊勢改良縞	七〇錢
同糸入縞	一、〇八
笠井糸入縞	一、〇〇
瓦斯二子	一、一〇
同羽二重縞	一、八〇
物産縞	七五
糸入愛國縞	一、一〇
極天結城地	八八
本場青縞	一、三五
蜜柑（一箱ニ付）本場上物	七〇錢
同中物	五〇
同並物	三五
駿遠上物	四五
同中物	三〇
同並物	二五

品名	一月七日
製茶（一貫目ニ付）山城江州稀大頭	二円、五五
同稀頭	二、二〇
同大頭	一、七五
同中頭	一、四五
同中茶	一、二七
狹山稀大頭	二、〇〇
同稀頭	一、七三
同大頭	一、四五
同中頭	一、三〇
同中茶	一、〇五
鰹節（十貫目ニ付）土佐上	二円三、〇〇
薩摩大	一九、五〇
城の腰小秋	一九、〇〇
房總大	一三、〇〇
銚子上	一四、〇〇
水戸磐城	一三、五〇
乾海苔（百枚ニ付）洲崎	九〇 七五 九〇 五五 九〇 五〇 七〇 五〇 六五 四五錢
大森	
深川砂村	
大師潮田	
上總	
水油（一樽ニ付）地水	八円、六〇
胡麻油	九、七〇
荏油	九、六〇
桐油	五、五〇
綿油	：：：
坂水	七、五八
石油（一箱ニ付）チヤスター	一円、五一
デボース	：：：
ホーキ	一、五二
ロシヤ	一、五一

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

震地傳道隊報告

婦人矯風會錄

要領

從來、救濟上の裨助、個人傳道業に從事したる吾隊員は、今や機熟せりと信じ、去三日以后團躰同行して岐阜縣下の主なる地方に巡回傳道せり。

藤井米八郎氏は、初來孤兒救濟を旨として隊に入りしに、今や名古屋に震災孤兒院の成立を見るに至りしかば、此度び引上げ歸京したり。

佐々木笑受郎氏は、初來の約二ヶ月間の期滿ちたるにより不得止歸港したり。

●巖本善治氏巡回日記略

十二月三十日朝二番滊車にて大須賀亮一氏同伴出發。女生三名孤女一名見送り。女生伏見きみ子靜岡迄同伴出發。

大垣隊員へ電報。

夜十時半名古屋着。湯谷磋一郎、小野垣兩氏、大垣より來合停車場に待つ。同伴して東魚町中嶋屋に一泊す。石井十次氏今夜余を待ち明早曉出發せんとすと聞けば也。石井大須賀兩氏と共に會談夜三時に至る。

十二月三十一日朝七時。大須賀氏、石井氏に伴つて岡山孤兒院に行く。八時、松田順平氏病を犯し來會。則はち、湯谷、小野、松田三氏が隊の運動に關する談話を聽く。大垣、藤井米八郎氏より昨夜西京より歸垣せし旨の電報あり。午后隊員祈禱會の后ち、救濟事務所に芝田氏を訪ひ、其后、杉山重義、小室重弘、鈴木才三、丸山愿諸氏を歷訪し大演說會の事を談ず。晩、松田順平氏宿所に泊す。芝田氏、岩永儀太郎氏を伴つて來訪大演說會の事に付更に協議あり。夜、美山貫一氏を訪ひ、且つ其越年迎新祈禱に臨む。一時歸宅、菊地(三郎)小出兩氏來談、震災地窮民授産場設立の案を開く。東京諸氏へ通信並に記錄調查の爲め夜を徹す。

一日朝五時前、湯谷、小野兩氏同伴出發、名古屋停車場より木曾川に車行す。木曾川より渡川車走、十一時笠松病院に着す。大坂より來看せる看護女學生三安濱丈二女史、菊地乙之介、田中軍醫、當郡長等に面會。朝飯后出發、湯谷氏同伴車走三時岐阜に着す。途中、笠松避病院を見舞ひ、看護女學生大塚女史に面す。救濟事務所掛青年、宇佐兄弟、池邊、吉澤、長門諸氏來訪。吉澤氏より救育所善后策を開く。湯谷氏同伴、南小柿市來兩氏を訪ひ豊木村避病院の事を談す。チヤペル氏方に森、富永兩氏を訪ふ不在。晩、松田順平氏尾して來岐。夜、松田氏同伴、病院長佐々木曠氏を訪ひ、腸チブス蔓延の事及び廢娼の事を談す。夜二時就眠。東京飯野吉三郎氏、及明治女學校、等へ電報及電答。

二日早朝、縣參事官救濟委員長、後藤敬臣氏を訪ひ、救育所二月末廢止后の策並に廢娼上の事を談ず。救濟所委員、富永森兩氏を訪ふ。ぜげん加藤芳久來談。宇佐、吉澤兩氏來訪。十時半、湯谷松田兩氏同伴岐阜を發し、午后一時大垣本部に着す。大須賀亮一氏今午岡山より歸り不得止事故あり先んじて歸京せり。藤井氏あり、小野氏、笠松より來會せり。晝飯后、近所磯野直爲氏方に會合し、隊會を開き、明日以后迄同傳道の方針、順序、盟約等を議決し、且つ藤井氏は歸京せらるゝことに議定したり。岐阜救濟所より電報あり、引つゞき委員長南小柿氏來車、豊木村避病室の事に付談あり。隊員中村友吉氏來會。晩、大垣病院を見舞ひ隊員看護婦玉生クニ子を訪ふ。郡長鈴木徹氏を訪ひ病院の事を談ず。夜食后、傳道師本田清次氏宅に集會を開き、松田湯谷兩氏及余祈禱感話す、來會者十四名。看護婦高須女史に面す。會散后、磯野氏方に歸り、松田、湯谷、藤井、宮崎利道氏等と會談す。玉生クニ子來訪。四時半就眠。東京明治女學校より電報あり。

三日五時半起、藤井米八郎君同伴大垣を發す。宇佐氏、吉澤氏、南小柿氏等に書を遺す。十二時、市の宮停車場にて藤井君に別れ、獨り、西大海道、布袋野村を巡廻す。布袋野村に孤兒を見る。四時名古屋白壁町に着し震災孤兒院を見る。五時、美山貫一氏を訪ひ丸山愿氏に會し更に大演說會の事を談す。六時半、魚町中島屋に歸る、磯貝氏來訪。青年會員、及び岩永、芝田、杉山の諸氏來訪皆な大演說會の事に拘はる。大垣へ禮狀を發す。七時半發、八時の滊車に乘じて東京に向ふ。停車場より津田仙氏に向け電報を發す。夜中車内に藤井氏より岡山孤兒院及び播州博愛社の景況を聞く。

四日朝八時半新橋停車場に着す。十一時家に歸る。

左の報告は、右嚴本巡回に先んずるの事歷なりと知るべし。

震地傳道隊特別通信　第十報

前報に言へるが如く去る廿三日藤井湯谷兩君岐阜を辭し大垣に歸着す東京本部より贈附せる電報端信及通信等を領せり

廿四日、昨夜地震ひ且つ鳴ること常日より強く且つ數々也き朝橫濱よりの私電に接し東部の此地よりも强震せるを知る是日藤井湯谷共に一車を賃し大垣救濟所の衣類を携提し東一里半許り隔たりたる古橋村に至る此地

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

古橋治療所

あり既に讀者の知らるゝか如く震災後夙に赤十字社の手によりて設立せられたるもの也今は縣廳の支配に屬し地方醫員擔任せらる入院患者十九名あり內重傷のものもありさいふ看護婦さして大坂天滿教會員村上さと子働かる姉は現今我隊員中村友吉氏を助けて根尾谷に居らるゝ高須せい子さ共に十一月一日より今尾に在りて力を盡されたる人也唯た獨り未信者中に在りて善く主の榮光を現はしつゝ居らるゝ是か爲めに事務員等も頻書を繙き教理を探るさいふ

病院にて村長に面し後書記某氏に伴はれ人足に荷物を荷はしめて部內五ヶ村を巡回し兼て調へたりし戶々につき衣類雜品を配賦す親しく就て觀察すれは更に種々の詳細なる情實を知り得て藤井氏さ共に巾を濕ほすこさ其幾度なるを知らす又此部內にて兩親なくして親戚に養育せらるゝ可憐の孤兒數名あり夜七時に至り僅に此部內を終りたれは再ひ病院に至り一夜の厄介を掛けたり

廿五日、朝病院を辭し人足に伴はれて隣の唐栗村役場に至り村長に面し暫く窮民の再調査をなし十一時さなりけれは中飯を領けぬ

珍味の晝飯

さして膳に上りしは里芋さ揚け豆腐の羹たるもの也之を味つくるに黑砂糖を以てす揚け豆腐は油合羽の如く齟み來て呆然之に加ふるに蘿蔔さ豆腐さの羹あり其飯を問へは色黃にして味粗々たり然れさも村長の料理屋に命したる賜物にして村舍の珍味、深閨に起臥し玉食桂薪の人の得て知らさる所のもの也かくて村長さ共に部內七ヶ村を巡回し物品を配賦するこさ例の如し……

堤防工事

縣下に目下必須のものは木曾長柄揖斐諸川の堤防工事也故に各所に緊急堤防工事事務所の標札を多く目擊したり而して數十百の工夫土砂を運搬す其土砂を千本づきさ稱して婦女小兒にして手頃の棒をもて且つつき且つ謠ふ恰も念佛躍りの如し工夫の上は廿五錢以下等差あり小兒猶ほ三銅を得べし

廿四年のクリスマス

さして紀念すべきは大垣の事務所に於ける廿五日の夜なりけり時が時なれは……然れさも余思ふに近年クリスマスさ言へは茶番狂言の如き神の教會にて行ひ難き業多きころ憂たさけれ主の降誕は抑何事そ固より喜ひ中に在り外色に現はるゝは人情の常なり然さも今や我邦家危急の機に臨みなから音樂津々喜笑啞々妄りに知らさるまれして徒に西洋風に心醉するは抑何等の事そ國家泰平擊壤萬歲を祝すへき時期なれはいざ知らす！願くは此聖き祝日をして徒に增惡の機さなす勿れ主の降誕は既に其苦痛也ベツレヘムの祝聲は十字架に釘けよさ反響したり馬槽に洗ひし湯はゲツセマ子の血汗さなりたり願くは我同胞よ日々主の苦みを負ひ邦家の改造[illegible]從事す[illegible]我[illegible]家悔改の爲めに[illegible]勞を[illegible]ん

大垣の人心

或る部分を觀察すれば腐敗甚だしく乞食の根性日々に增成するの感なきにあらす故に一日の勞を執らんよりむしろ救濟品の配當に洩れざらんために眼さ耳さを勞する者亦鮮からすさいふ而質商にきくに或者は既に十二月に至り千餘圓の受け出しを取扱ひたりさ又或るものは七百圓に至れりさ而して而して質入をなすものなしさいふ又以て景氣の一斑を知るべし而して陽には泣き求めて陰かに救濟物品の是れ如何を妄評す

講義所の新竣功

聖公會の講義所僅かに成る廿七日最初の集會さして又最後の安息日さして集會を開く地は本町にして中央の場所也會する者信徒數名求道者三四名外に立ちて聽けるもの廿名京都より患者訪問の爲めに來りしトウカツ、バロス二氏亦來會せらる余は此紀念すべき安息日の說教者さなるの光榮を得たり時に二三の逃け妄評をなしたるものもあり然れさも求道者中には望みを屬すべき人あり又將來の形勢都合よろしき摸樣に想はる

藤井氏は家用のため去る廿六日京都に趣かる

衆議院の解散に付て都門は定めし彼是すべけれさも當町の如きは少しも政治上の大變動も大波瀾も全く知らさるものの如し家屋は逐日新築に着手するもの存外に多し先つ賀すへきこさなり

大垣の授產事業

も大阪より實業家馬揚氏來りて愈悔救輸出用の提燈製造に着手するこさゝなれり目下工場は考案中也

人事茫々

歲末の數日さなり一年の大勘定に繁忙の時さなれり然さも當町にては七五三飾りも用意なく何も歲暮の感なし唯た自ら顧て一年の爲すこさなく更に事業のなりたるこさなく唯た父を喪ひしのみ生涯の紀年の年なりさ謂ふへきか

十二月廿八日　於大垣　湯谷磋一郎

震地傳道隊會計報告

第六回（十二月廿二日より一月四日に至る）

●入の部

○金百六十四圓六十六錢九厘　前回迄入金合計
○金十七圓九十五錢　今回分

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

右內譯

三圓五十五錢(廿九日)	築地三一神學校
八圓(廿九日)	築地福音教會
六圓(廿九日)	ガーデナー氏
四十錢(三日)	布袋野村一婦人

合　計百八十二圓六十一錢九厘

●出の部

○金百八圓三十七錢一厘	前回迄出金合計
○金十六圓十二錢九厘	巖本善治巡回中出費

右內譯

十二錢(三十日)	新橋迄人力車
十五錢(三十日)	大垣へ電報
二圓三十五錢(三十日)	新橋より名古屋迄下等滊車代
二十錢(三十日)	車中二回辨當代
二十一錢(卅一日)	中島屋一泊料
三十四錢(卅一日)	右中島屋方湯谷小野二氏夕仕度なし同宿料
四十七錢(卅一日)	中島屋方晝飯四人代
三十二錢(卅一日)	午后市中諸君巡訪車代合
十五錢(卅一日)	大垣藤井氏へ向け電報料
四錢(卅一日)	東京植村星野へ郵券
三十錢(卅一日)	植村及明治女學校へ電報
四十五錢四厘(一日)	隊員四人名古屋一泊料
四十二錢(一日)	岩本、湯谷、小野名古屋より木曾川迄下等滊車代
十五錢(一日)	三人分車代
八錢一厘(一日)	三人渡船代
二十錢(一日)	巖本湯谷笠松より岐阜迄車代
十錢(一日)	岐阜宿屋茶菓子
九十五錢(二日)	巖本、湯谷、松田三人岐阜晝飯及一泊料
十・錢(二日)	右茶代
九十錢(二日)	岐阜より大垣迄三人車代
八錢四厘(二日)	右途中橋賃
八拾錢(三日)	大垣より木曾川迄巖本藤井人力代
三錢(三日)	木曾川より一の宮迄巖本滊車賃
拾四錢(三日)	木曾川より名古屋迄藤井滊車賃
拾五錢(三日)	星野氏へ電信一音信
八錢(三日)	名古屋停車場より藤井人力代
九錢(三日)	名古屋にて藤井人力代
四拾六錢(三日)	名古屋にて巖本藤井宿泊料
拾六錢(三日)	停車場迄藤井人力賃
四圓七拾六錢(三日)	名古屋より新橋迄岩本藤井下等滊車賃
三拾錢(三日)	滊車中にて食料
十八錢(三日)	市の宮より布袋野村に至る巖本車代
四十錢(三日)	布袋野村より名古屋に至る車代
四錢(三日)	大垣へ向け書狀を發す
十八錢(三日)	津田仙氏へ向け電報及手數料
十一錢(四日)	新橋より藤井人力代
十一錢(四日)	右同じく巖本分
○金十九圓〇五錢	大垣にて借滯分拂返し
七十五錢(一日)	松田順平氏食料拂
一圓五十錢(一日)	松田順平氏へ別渡
五圓八十錢(二日)	大垣事務所へ食料滯拂
五圓(二日)	古田くに子入用滯拂
六圓(二日)	藤井湯谷兩氏入用滯拂

合　計百四十三圓五十五錢

差引殘金三十九圓〇六錢九厘

今后の隊員出費は、惣て一ヶ所定在の上の入用なれば一々細密の報告あるべし、從來は、專ばら奔走の中ちに救濟寄捨に用ひしもの多く、一々之を細記せず、責任は在震地隊員一同に於て之を負ふ。

一月三日以后、傳道巡回順序左の如き預定なり。

岐阜縣下。高須今尾。大垣。北方。岐阜。豐木。笠松。竹鼻。

二月に入りて愛知縣下名古屋に美山氏と共に運動せんとす。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

明治女學校幼年科新設の廣告

本校從來本科の下に豫科を置き高等小學相當の授業致來りしが今の小學敎授上德育に慨する所あり又本校主旨とする所の敎育を施さんには之を更に幼少なる年代より初めざる可らずと信じ此度豫科の下に更に幼年科を新設し專ら尋常小學相當の授業を爲さまく欲す、左れば六歲家庭の温養を蒙むり了りたる曉は直に此幼年科に入り追ふて豫科に登らば其後三年にて小學全科卒業の資格を得べし、而して此小學科の科程は無論文部省指定の則に隨ふ、其精神上の修養法に至りては自から世間一般の小學校と趣を異にする者あらん吾輩の精神希望に贊助せらるゝ諸君は請ふ其幼けなき愛孃を來學せしめよ。

月謝三十錢、束脩金なし、冬期薪炭料五錢。

遠路通學しがたき人は本塾に寄宿せしめ年長生徒一名を其保護者となし一切監督す。

右寄宿塾費一ヶ月二圓五十錢、塾費八十錢。

（一月十五日始業、至急申込を要す）

東京下六番町六番地

明治女學校

新年遣ひ物佳書

は面白き勸懲繪草紙にして第一子供にも分り易く大人にも敎へとなるべき意味ある書物なれば土産遺物としては無類のものに候

定價一冊五錢

郵送料二錢

女學雜誌社

皇后陛下
明宮殿下
御覽濟の書

巖本善治妻譯

小公子

（リツトル。ロード。フオントルロイ）

小供のよみ本

譯者の序に曰く、母と共に野外に逍遥する幼兒が、幹のくねり、尋常ならぬ一本の立木に指ざして、かあさん、あの木は小さい時誰かに踏れたのですネイ、と申たとか。考へて見ますと、美事に發育すべきものを遮ぎり、素直に生ひ立つ筈の者をくねらせる程、無情なとは實に稀で御坐り升。邪道に陥らふとする父の足をとゞめ、卑屈に流れ行く母の心に高潔の德を思ひ起さするは、神聖なる天職を擔ふ可愛の幼兒に限ります。私は深く幼子を愛し其恩を思ふ者故此珍重すべきまろうどを尚一層優待したいと切に願ふ者です」と。斯る主意にて譯成る。原著は近頃英米に轟き渡りて、子供の讀物として愛々しきと潔き事の類ひ無きは更にも言ず、白髮の老者も心頑なの人も、之を讀る間は天使に接する如しとて、推賞大方ならず、改版十數回、且尚ほ劇に演して非常の喝采を博しぬ。譯者は斯る原文の味を損せじとて辛苦せられ、紙數二百八十頁密書十四箇入の大本として今日世に進め玉へり。一冊正價三十八錢。郵稅八錢也

發兌元　東京市麴町區下六番町六番地　女學雜誌社

女學雜誌社出版書目

著者	書名	冊數	價
鈴木弘恭大人述	つれ〲草講義	一冊	價金八錢
鈴木弘恭大人述	文法口授	一冊	同十六錢
鈴木弘恭大人述	百人一首講義	一冊(改正)	上三十五錢 並二十八錢
船越鼎太郎君著	產婦小兒攝生法	一冊	金十六錢
關輪正路君纂	ひめ鑑	一冊	同四十五錢
中島俊子君著	善惡之岐	一冊	同卅五錢
橫山雅男君著	婚姻論	一冊	同十六錢
島田三郎、植木枝盛兩君演說	廢娼演說	一冊	同五錢
巖本善治君述	妓樓全廢	一冊	同五錢
島田三郎、巖本善治同著	公娼可滅	一冊	同四錢
農學士寺尾熊三君著	植物學	一冊	同十二錢
林學士星野愼之介君著	昆虫 植物 金石 採集法	一冊	同十錢
明治女學校教師八木兼辰君著	和畫手本	四冊	同一圓
女學雜誌社編輯	演說著作材料	八冊	同四十錢
巖本善治君著	木村鐙子小傳	一冊	同八錢
訓蒙繪双紙	猫と鼠	一冊	同五錢

下六番町六番地

女學雜誌社

通信女學第三期生新募集廣告

學問隆盛の今日、女學の進歩一と方ならず、凡そ年頃の鈴君にして奮發學に就かぬは最と〱少なく、既に一家の妻となりし方にても晩學の勉強をさ〱年少の人に劣らぬも多し、概して何處の婦女子も皆な學問と云ふ事に心掛け凡そ此心掛なきものは當今の女德に欠けしやう思ふに至りぬると明治の代の恩澤にて有がたきことと云ふべし、因りて何處にも女學校の設けあり何處の娘君も茲に入學して日々の進歩目覺しきとなるが、既に妻となり母となりて一家子女の掛念ある方々は最早家を出て通學するとも出來ず又家に教師を引て教を受るも甚だ手數なれば今日の時世に斯る御婦人のみ此儘無學に終るべきかと心配する人も少なからず、此類の御婦人は何か家に在りて獨り稽古する工夫なきか又獨學に便利の書物はなきかと屢ば問合せあり、本社之を以し遂に意を決し、一昨年一月通信女學の仕組を新設し、毎月一冊の講義錄を出版して、四方晩學の婦人居ながら普通の女學を獨り學びするの便に供へたるが、二年間に一年づゝの課業を恙がなく卒へて、快ちよく各科を卒業したるもの九百餘名あり。然るに、去年一月申込の期に後れたる人々も少なからざるを以て、本年更に講義錄を再版し、改めて第三回の習讀者を募る。

教授科目左の如し。

萬國史、日本歷史、算術、簿記、理化學、生理學、動植物學、作文法文例、料理、歌詠方、女禮、和文讀本、漢文讀本、家政學、(衛生、育兒、看病を合す)裁縫、圖入地理、英學。

教師は、醫學士三島通良、農學士寺尾熊三、磯貝由太郎、木村祐吉、其他重もに明治女學校の教員諸君に委賴し、專ら親切鄭寧を主意なす。

代價一冊前金三十二錢(無郵稅)、半年分前金一圓八十錢、一年分前金三圓五十錢、一切前金に非れば發送せず。

明治二十五年一月廿五日第一號を發兌し、以後每月廿五日に出版して翌一ヶ月中の科目となし、其十二月に至りて全科卒業となす。

東京麴町區下六番町六番地 女學雜誌社

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

文部大臣子爵榎本武揚公題字
大學院醫學士三島通良先生編述

皇后宮御覽

はゝのつとめ

增補訂正 第二版

親の卷 妊婦產婦の心得 定價金三十錢(郵税二錢)
子の卷 育兒法 定價金四十錢(郵税四錢)

右は我國無双完全無比なりとの好評を博したる日本子母衛生書なり、華族女學校醫科大學產科婦人小兒科病室並に群馬縣高等小學其他の諸學校に於て參考書として用ゐらる、文章は談話體總平假字付にして極めて理解し易し、婦人方への贈物として屈上の好品なり

書肆 通三丁目 丸善。表神保町 中西屋。馬喰町 島利。春木町 島利支府。通旅町 中央堂
下六番町 女學雜誌社

女學書類發行

女學雜誌社編輯

家庭脈價 子供の談

紙數八十葉 郵税なし
定價十二錢

右は子供の爲になる好きお話にて、母親が言ひ聞かすに結構なる材料なり。第一、田舍音樂師。第二、龍の君、第三、熊と旅人。第四、風と日の喧嘩。第五、ハイ〱とタドイマ。第六、カンとクッド。第七、王にも勝てる人々。第八、母の愛。第九、柔順なる娘。第十、英雄の所業。第十一、まましき兄弟。第十二、正直な樵夫。第十三、慾婆。第十四、忠義の家來二人。第十五、不思議の新衣裳。第十六、小娘とガマ。第十七、尤も惡き所行。第十八、正直なる小娘。

面接日 木曜日午后三時ゟ
巖本善治

○普く主に在る姉妹に告ぐ

我儕今般同志者と相謀り、高知女子傳道學會なる者を設立したり。其の目的は有志の婦女をして、特別に聖書を講窮し、傳道の方法を實習せしめんとするに在り。主に在て愛する姉妹諸君の陸續來學あらん事を冀望す。
但し本會の規則幷に學科課程を一見せられ度諸君は一片の端書を寄送あれ。

明治廿五年一月

高知女子傳道學會

第三版

百人一首講義

上製美本 三十五錢
並製淡裝 二十八錢
郵税六錢 同四錢

新年の讀書に宜し
歌留多遊びに宜し
遺物に宜し
詠歌に宜し

女學雜誌社

普連土女學校入學廣告

本校廿五年一月十一日始業
本校ハ今般教授ニハ内外ノ良教師ヲ撰ミ寄宿取締ニハ本邦婦人ノ手ヲ以テシ務メテ懇切嚴肅ニ教育ノ任ヲ盡サントス通學寄宿共ニ入學ヲ申込マルベシ
東京市芝區三田功運町三十番地
私立普連土女學校

雜誌	一册	六錢	郵税。五厘(但府内無郵税)
	十一册	五拾八錢	郵税。五錢(同前)
定價	半年分	壹圓四拾六錢	府外は 壹圓五拾六錢
	一年分	貳圓六拾錢	府外は 貳圓八拾六錢

東京市麴町區下六番町六番地
發行所 女學雜誌社
編輯兼發行人 巖本善治
印刷人 堀口庄三

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

大學醫學士三島通良先生編述

皇后宮御覽

第二版

はゝのつとめ

親の巻 妊婦産婦の心得 定價金三十錢（郵税二錢）　子の巻 育兒法 定價金四十錢（郵税四錢）

右は我國無双完全無比なりとの好評を博したる日本子母衛生書なり、華族女學校醫科大學産科婦人小見科病室並に群馬縣高等小學其他の諸學校に於て參考書として用ゐらる、文章は談話體總平假字付けにして極めて理解し易し。婦人方への贈物として最上の好品なり

書肆　通三丁目 丸善。表神保町 中西屋。馬喰町 島利。春木町 島利支府。通塲町 中央堂

下六番町 女學雜誌社

子供の談

家庭 廉價 女學書類發行 女學雜誌社編輯

紙數八十葉　郵税なし　定價十二錢

右は子供の爲になる好きお話にて、母親が言ひ聞かすに結構なる材料なり。第一、田舍音樂師。第二、韓の君、第三、熊と旅人。第四、風と日の喧嘩。第五、ハイ〳〵とタヾイマ。第六、カンとクッド。第七、王にも勝てる人々。第八、母の愛。第九、柔順なる娘。第十、英雄の所業。第十一、ましき兄弟。第十二、正直な樵夫。第十三、慾婆。第十四、忠義の家來二人。第十五、不思議の新衣裳。第十六、小娘とガマ。第十七、尤も惡き所行。第十八、正直なる小娘。

面接日

木曜日午后三時々

巖本善治

高知女子傳道學會

我儕今般同志者と相謀り、高知女子傳道學會なる者を設立したり。其の目的は有志の婦女をして、特別に聖書を講窮し、傳道の方法を實習せしめんとするに在り。主に在て愛する姉妹諸君の陸續來學あらん事を冀望す。

但し本會の規則幷に學科課程を一見せられ度諸君は一片の端書を寄送あれ。

明治廿五年一月

第三版

百人一首講義

上製美本 三十五錢　郵税六錢

並製淡裝 二十八錢　同 四錢

新年の讀書に宜し　遺物に宜し

歌留多遊びに宜し　詠歌に宜し

女學雜誌社

普連土女學校入學廣告

本校廿五年一月十一日始業

本校ハ今般教授ニハ内外ノ良教師ヲ撰ミ寄宿取締ニハ本邦婦人ノ手ヲ以テシ務メテ懇切嚴肅ニ教育ノ任ヲ盡サントス通學寄宿共ニ入學ヲ申込マルベシ

東京市芝區三田功運町三十番地

私立普連土女學校

雜誌	一冊	六錢	郵税。五厘
	十一冊	五拾八錢	郵税。五錢
定價	半年分	壹圓四拾六錢	府外は 壹圓五拾六錢
	一年分	貳圓六拾錢	府外は 貳圓八拾六錢

（但府内無郵税）（同前）

東京市麴町區下六番町六番地

發行所 女學雜誌社

編輯兼發行人 巖本善治

印刷人 堀口庄三

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY